

American Rock Lyric Landscape



—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第10回

思い出を胸に人生を旅する男の歌

Glen Campbell
'Gentle On My Mind'



グレン・キャンベル
『ジェントル・オン・マイ・
マインド』
Capitol T2809 [1968]
⇒Capitol Nashville 05352302

飛び乗ったりしたけどね。あてのない旅をするなんて若さの特権だ。この先、何年続くんだろうと、自分でも思ったことがあるが、歳をとったらそれは辛いもの。

この曲はそんな男の、先の見えない旅がテーマなのかもしれない。人生という名の旅とも言えるだろう。初めて聴いた時はカジュアルでロマンチックな恋人を思うストーリーだと思ったが、聴けば聴くほど、深みがあり、哀しみが漂うんだ。

It's knowin' that your door is always open

And your path is free to walk

That makes me tend to leave my

sleepin' bag

Rolled up and stashed behind your

couch

最初は昔の彼女の家にいたときの思い出から始まる。彼女のドアはいつも開いているとあるが、それはいつでも遊びに来て、私への道は自由よ、と常に手を広げてくれる彼女の優しさだ。

だからこそ、俺のスリーピング・バッグ

Will not be cursing or forgiving
When I walk along some railroad
track and find

昔は誰かが二人が歩いている姿を見て、似合いだと言ってくれていた。世間は俺の悪口を言ったり、責めたりはしない。そんなことを考えながら、男はひとり淋しく線路沿いを歩いてくる。

That you're movin' on the back roads
By the rivers of my memory
And for hours you're just gentle on
my mind

またリピートになる。そして線路沿いを歩きながら、数時間ほど彼女のことを思い出す。とはいえず、まだここでは彼は彼女のところに戻りそうな気配だ。思い出の彼女の元へ。

Though the wheat fields and the
clothes lines
And the junkyards and the high ways
come between us

アメリカの音楽には恋人や家族を思いながら旅をするストーリーが多い。この「ジェントル・オン・マイ・マインド」も、そんな曲のひとつだ。

俺もアメリカに住んでいたときは友達の家泊まりながらアメリカ中を旅したから旅人の気持ちはわかるつもりだ。学生の夏休みは3か月もあるし、高校や大学を卒業した後旅に出る若者たちもたくさんいる。

彼女のソファの後に丸めておける。居心地がいいからだ。

And it's knowin' I'm not shackled
By forgotten words and bonds
And the ink stains that have dried
upon some line

俺には彼女との間に忘れた言葉や約束がないし、ましてやそれに縛られてないことを知っているから気が楽だという。ちなみに「shackle」とは、刑務所で付けられる足かせのこと。「bond」は約束というより、契約に近いニュアンスだ。

詩には線の上の乾いたインクのシミにも縛られていないとあるが、これは結婚の書類を指す。シミはサインのこと、日本では印鑑だ。すくくカジュアルな付き合いという印象だが、きつと男は彼女と真剣に付き合いたくないのだろう。彼女もそれを承知の上だ。

That keeps you in the back roads
By the rivers of my memory
That keeps you ever gentle on my mind

親の住まいから一番遠い街に引越することも多いから、会いに行くのにも長い旅になってしまふ。友達の家転々と居候しながらの気楽な旅だ。

ほとんどの若者たちは大きな家を友達とシェアをして住んでいるから、泊まるスペースはある。スリーピング・バッグだけ持って行けば、どこにだって泊まれる。そして移動はバスかヒッチハイク。昔は汽車に

彼女はきつと優しいのだ。詩には、だからこそ俺の思い出のなかに流れている川や裏道に、いつまでも優しいあなた(彼女)がいるとある。

ニュアンス的に、この男は彼女の家を出たばかりだと感じさせる。
It's not clingin' to the rocks and ivy
Planted on their columns now that
bind me

俺たちの関係は、石とアイヴィー(アメリカ東海岸の名門大学群の出身者)ではない。「rocks and ivy」とはアメリカの東によくある、アイヴィーが絡んだ石造りの建物のこと。昔からある伝統的な家だ。columnsは南面がよく見かける、正面に石柱が立つギリシャ風の造りだ。つまり歴史を感じさせる言葉が続く。きつと彼女は家の娘なのだろう。

Or something that somebody said
because
They thought we fit together walkin'
It's just knowing that the world

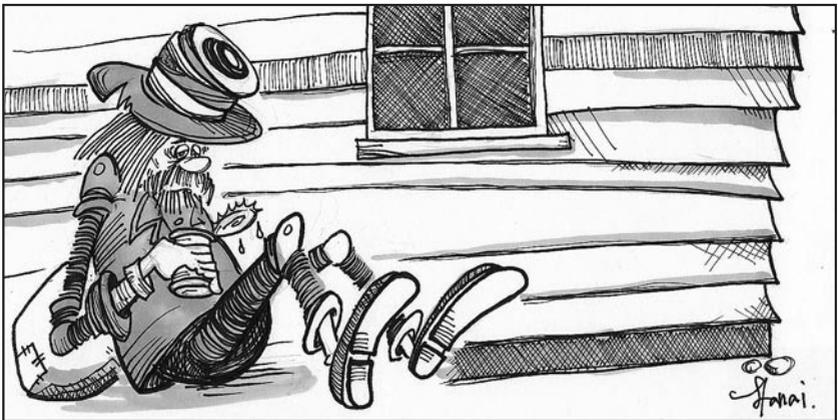
サイド・ヴァースではすごく遠いところに来て印象だ。小麦畑や洗濯物を干すヒモの中を直行している、というくどりは、列車の中から見ている風景のようだ。そしてジャンクヤード(ゴミ屑の集散所)やハイウェイがふたりの間にある。ふたりは離れてしまったんだ。

And some other woman's cryin' to
her mother
'Cause she turned and I was gone

彼には彼女だけでなく、ほかにも女性がいた。その女性は自分の母親に泣きついていた。振り向いたら、男がいなかったからだ。

もしかしたら、約束もなく自由だと思っていたのはこの男だけで、最初の彼女もこんなふう泣いていたのかもしれない。つまり虫のいい男なんだ。

I still might run in silence
Tears of joy might stain my face
And the summer sun might burn me
till I'm blind



沈黙の中、彼は旅を続けている。彼の顔には嬉し涙が伝う。そして目が見えなくなるまで、夏の太陽が彼を照りつける。なぜ嬉し涙が出るのか、そんな説明はないが、きつといい思い出に包まれて涙が出るのだと思う。

とはいっても、すごく厳しい旅をしている感じが伝わってくる詩だ。

But not to where I cannot see
You walkin' on the back roads
By the rivers flowin' gentle on my
mind

どんなに太陽が目も照りつけても、彼女の話は心のなかで見えている。いつも彼女は彼の思い出のなかを歩いている。

I dip my cup of soup back from a
gugin' cracklin' cauldron
In some train yard

次のヴァースで、彼はホームレスになっていることがわかる。どこかの列車置き場

で、ひび割れている大鍋からスープをすくってカップに注いで飲んでいる。詩にある'gugin'はスープが沸きたつゴボゴボとらう音、'cracklin'はパンチと火が燃える音、'cauldron'は魔女が使いそうな大きな鍋のことだ。

舞台はアメリカによくある列車の操車場。次に列車が発車するまで、ホームレスになった彼は仲間たちとそこで作っているスープを飲んでいるんだ。

My beard a rustlin' coal pile
And a dirty hat pulled low across my
face

男は相当汚く、みすばらしくなっている。俺のヒゲは風でシカシカと音をさせる石炭だらけのバイル・カーベットのようだ。顔は汚い帽子で隠している。それは寒さから身を守っている姿だ。

Through cupped hands 'round a tin
can
I pretend to hold you to my breast
and find

That you're wainin' from the back
roads

By the rivers of my memory
Ever smilin', ever gentle on my mind

使い古しのブリキの空き缶を手でくるみ、彼は昔のようにその胸に彼女を抱きしめていると心に描いている。'cupped hands'というのは両手で持つこと。この部分の詩では、思い出のなかで、彼女が笑顔で彼を待ち続けている。その思い出があるから、彼はやっていける。どんなに人生が辛いものになっても、昔の思い出があれば、現実から逃げられるんだ。自分で選んだ自分だけの道。ほかの人は誰もわからない。こんなふうにはヴァースごとにとんどん遠い場所へ行き、昔の生活から離れていく。

この曲はもともとソングライターのジョン・ハートフォードの作品で、バンジョーが入ったブルーグラス・フォークだ。驚くことに、300人以上ものミュージシャンがカヴァーしている。エルヴィス・プレスリーは彼らしい独特のスタイルで



ジョージ・カックル / GEORGE COCKLE
ラジオ・パーソナリティ。1956年、鎌倉生まれ。18歳で新宿2丁目のロック・バー<開拓地>で、音楽の世界にのめり込む。ハワイアンなどのCDをプロデュースする傍ら、インターFMでは音楽番組「レイジーサンデー」のパーソナリティをつとめ、音楽通ぶりを披露。さらにサーフ・イヴェントなどのMCでも活躍。
http://whatsupmusic.inc.com